

	受賞者		授賞理由	授賞式の様子
平成22年度 ベストティー チャー賞	理学部	臼杵 毅 教授	氏が長きに亘って数理・物質領域で開講してきた授業『アモルファスな話(化学A)』は、平成21年度の「学生による授業改善アンケート」で総合評価が4.86という極めて高い評価を得ている。授業を参観した教員からも「うまい」と評価されている。自然の理を理解する喜び、学問の面白さに触れることができる自然科学の授業を展開していることは高く評価できる。	
平成22年度 ベストティー チャー賞	地域教育文化学部	田口 茂 准教授	氏は前期に『ドイツ語 I A』、後期に『ドイツ語 II A』の授業を担当し、平成21年度の「学生による授業改善アンケート」では総合評価がそれぞれ4.67、4.76という高い評価を得ている。氏は学生とのコミュニケーションをうまくはかっており、『ドイツ語 II A』のアンケートでは、「コミュニケーション」の設問項目で4.94という極めて高い評価を得ている。このように、氏と学生の信頼関係が構築されている授業であることが推察される。	
平成23年度 ベストティー チャー賞	地域教育文化学部	渡辺修身 准教授	氏がこれまで開講してきた授業『モーツァルトの音楽と生涯(芸術)』は、平成21年度の「学生による授業改善アンケート」で総合評価が4.62と高い評価を得ている。授業を参観した教員からも「学生の知的関心を引きつけながら行われる講義は、興味深く、理解しやすく、示唆に富んだ内容である」と評価されている。	
平成24年度 ベストティー チャー賞	エンrollment・マネジメント部	福島真司 教授	氏は、学生の内発的動機付けを重視するために、授業に積極的に実社会の素材を利用し、学生の授業参加への意識を高めている。平成23年度に行った4つの授業の「学生による授業改善アンケート」では、総合評価が4.88、4.88、4.75、4.97と非常に高い評価を得ている。また、これまでFD合宿セミナー、FDワークショップにもパネラーとして積極的に参加している。	
	理学部	大西彰正 准教授	氏は、長年にわたって共通科目「力学の基礎」の一コマを担当しており、ゆっくりと学生に語りかけるように授業を進め、また毎回小テストを行って学生自身が理解度を確認する機会を設けるなど、きめ細やかな指導で大変好評を得ている。また、「学生による授業改善アンケート」の過去3年の総合評価の平均点が、開講されている「力学の基礎」全体の評価が3.77である中で、4.38と高い評価を得ている。さらに、実験を取り入れた教養セミナーを開講し、学生が主体的に取り組めるように工夫している。	
平成24年度 ベストティー チャー賞 【学生推薦】	人文学部	下平裕之 教授	平成24年1月に本学基盤教育で始めて実施した学生投票の結果、ベストティーチャーとして下平氏が最多得票を得て、晴れある第一回目の学生推薦のベストティーチャーになった。投票用紙には「とつてもやさしい、大好きです」「講義がとつても分かりやすいから」「優しさの神」「素晴らしい先生です」のコメントが書かれてあった。また、これまでFD合宿セミナー、FDワークショップにもパネラーとして積極的に参加している。	
平成24年度 ベストティー チャー賞 【新人賞】	基盤教育院	荒木志伸 准教授	氏は、平成23年度に「山形の歴史と文化」「考古学入門」「フィールドワーク山寺」の授業を開講し、「学生による授業改善アンケート」では、総合評価が4.83、4.63、4.82と非常に高い評価を得ている。単なる歴史的知識に留まらない地域への理解を試みることで、学生からは「歴史は嫌い」「歴史は必要ない」という考えが大きく転換したとの評価を得ている。また、本年度のFDワークショップにもパネラーとして参加する予定である。	
平成25年度 ベストティー チャー賞	地域教育文化学部	新海 宏成 講師	共通科目「スポーツ実技(サッカー)」「健康・スポーツ科学」「スポーツ・セミナー」を担当する新海宏成氏の授業の特長は、スポーツ・バイオメカニズムに関する深い知識と最新の知見に基づき、また実験・測定から得られた具体的なデータを示しつつ、スポーツ現象を科学的な観点から捉えることを学生に具体的にかつわかりやすく教えることにある。氏の授業を通して、学生たちは、多様化するスポーツ現象を新たな視点から理解するとともに、スポーツ科学に深い関心・興味を寄せている。その一端は「スポーツ科学とデータ解析」に関する授業アンケートからも垣間見ることができる(総合評価4.54)。ちなみに氏は平成23年度のFD合宿にも参加しており、FD事業への理解も十分認められる。こうした氏の試みは、様々な領域に興味・関心を持たせることを旨とする基盤教育の範ともなり得るのであり、作業班はベストティーチャーの1名として委員会に推薦することにした。	
	基盤教育院	佐藤 琴 講師	氏は平成24年度に『江戸絵画の見方(教養セミナー)』(前期2コマ)、『風景画を見る視点(文化論)』(後期2コマ)を開講し、それぞれ30名~60名ほど(合計約200名)の学生に授業を提供している。「学生による授業改善アンケート」では、総合評価が4.64、4.54、4.43、4.62と高い評価を得ている。授業では、よく準備された豊富な画像資料を駆使し、説明も明確な語り口で、学生が理解しやすいよう配慮されている。教員が美術史的な背景など専門的な観点にふれる前に、学生たちが自身が絵を観察して鑑賞文を発表し、同時に他者の見方を聞く手法をとっている。この過程を採り入れることで、学生たちからは「自分が気づいていなかった点に気づくことができた」との評価を得ている。気づきを促すことは、基盤教育全体で重要なことと言える。また、他教員の授業を見学して参加型の授業を工夫するなど、自らFDにも取り組んでいる。	

	受賞者		授賞理由	授賞式の様子
	小白川キャンパスキャリアサポートセ	松坂 暢浩 准教授	氏は、平成24年度前後期に、「キャリアデザイン(学際)」、「キャリアデザインⅡ(学際)」を2コマずつ担当した。この講義は、ご自身の実社会での経験を生かした魅力あふれる内容で学生に大変好評である。授業改善アンケートの結果を見ても平成24年度の前後期4コマの講義でいずれも総合評価が4.7と非常に高い数値を示している。しかも、受講生の数が100を超えての教値は非常に学生の満足度が高いことを表している。講義も前期と後期で講義設定を変えて一貫性のあるテーマ設定になっている。さらには、平成24年度基盤教育ワークショップに参加し、教育力の向上に努めるとともにキャリアサポートにかかる情報を提供した。	
平成25年度 ベストティー チャー賞 【学生投票】	基盤教育院	杉原 真晃 准教授	平成24年度末の学生投票の結果、ベストティーチャーとして杉原真晃氏が最多得票を得て、学生推薦のベストティーチャーになった。投票用紙には「数百人単位の授業だったが、レポートにも返答が書かれていたし生徒とのコミュニケーションを大切にしているように思えたから」「一人一人親身になってくれる授業が楽しかった」「学生主体の授業でとても勉強になったから」の理由が書かれてあった。杉原氏は平成20年度のベストティーチャー新人賞の受賞者でもあり、今回の受賞は氏の授業改善にかける日々の精進を伺わせるものである。加えて、氏はFD合宿セミナーを始め本学のFDを担当している。	
	人文学部	中島 宏 准教授	中島宏氏は本学に赴任した平成20年より「日本国憲法」を担当している。学生の関心の高い科目であり、毎年、履修者は200名を超える(平成25年は261名)。授業は、新聞記事、ネット上のニュースサイト、漫画等の豊富な資料とともに周到に準備され、「学生自身が考えたいくなる」ように質問と解説が繰り返されており、徹底した双方向のやりとりが実現されている。また氏は、抽象的な法的概念について学生が具体的なイメージを描くことができるよう、身近な事例(自身の経験談など)を挙げながら説明している。軽妙な語り口でありながら、ポイントを押さえた的確な説明に対する学生の評価は極めて高く、それは授業評価アンケートの総合評価が、過去5年間、4.42、4.50、4.47、4.83、4.65と非常に高い数値であることにも表れている。そして自由記述欄には「おもしろかった」という率直な感想が多数記載されており、学生の集中力を途切れさせない授業内容と高度な教授方法の証左であるといえよう。さらに、自己のレベルアップを図るべく、平成20年のFD合宿に参加し、平成20年度、21年度のベストティーチャー賞公開授業を見学している。こうした積極的な授業への取り組み、意欲的な改善の努力に照らし、中島宏氏が、ベストティーチャーにふさわしいと考え、推薦する。	
平成26年度 ベストティー チャー賞	理学部	栗山 恭直 教授	栗山先生は、基盤教育のサイエンスコミュニケーションⅠ、Ⅱにおいて、ICTとグループワークを取り入れた質の高い学生主体型授業に取り組みされてきました。この授業には、基盤教育の柱である「人間力」の基礎能力(課題発見・探求能力、問題解決能力、プレゼン能力、コミュニケーション能力、多様な知識等)を育成する教育プログラムが適切に整備され、更に時間外学習にも配慮された授業構成が取られています。このことは最近出版された「つばさプロジェクト」の冊子で紹介されています。こうした先生の取組は学生から高い支持を受け、授業評価アンケートにおいては過去平均4.6以上の高評価を得ておられます。一方で、栗山先生はFD活動として授業の工夫・改善、学生主体型授業の普及にも精力的に取り組まれており、基盤教育においては、平成18年度からワークショップのコーディネーターやパネリストを勤められるなど、長年にわたって基盤教育の教育改善に尽力されてきました。以上のことから、栗山先生は基盤教育のベストティーチャー賞に最も相応しい教員であると判断され、推薦させていただくことといたしました。	
	基盤教育院	渡辺 絵理子 准教授	氏は平成25年度に生物科学に関連した授業を8コマ開講をのべ778名の学生を担当しており、「学生による授業改善アンケート」では総合評価が4.50、4.45、4.26、4.95、4.53、4.60、4.46、4.92と安定して非常に高い評価を得ている。これらの授業は、学生をアカデミックな生物学へ誘う高度な内容、リテラシーとしての側面を持つ多様な学生への入門的内容、そして学生主体型の実習をともなうセミナー、の3つに分けられる。大学では複雑な生命現象のより立体的な理解が求められるが、氏の担当授業では、専門的知識に裏付けられた豊富な例示や実証を元に「生物は暗記科目である」という先入観を外し、学生が主体的な学びへと向かうよう配慮されている。授業では豊富な画像資料を配布し、適宜動画を使用することにより、ダイナミックな生命現象についての理解を助けている。また授業の内容と関連した時事・科学ニュース記事等を紹介するなど、知識を自分たちの人生と密接に関連したものとして理解していくことができるよう工夫されている。さらに、学生が理解度を自己認識できるよう、隔週で確認テストを実施している。	

	受賞者		授賞理由	授賞式の様子
平成26年度 ベストティー チャー賞 【学生推薦】	基盤教育院	千代 勝実 教授	学生投票の結果、ベストティーチャーとして最多投票を得ての受賞。投票内容には、「とてもわかりやすく、ちゃんと学生の事を理解してくれるため」「力学の授業がとても分かりやすい」「授業が非常に分かりやすく、要点をきちんと教えてくれたこと」	
平成26年度 ベストティー チャー賞 【新人賞】	人文学部	大久保 清朗 准教授	大久保清朗氏は、全国紙にコラムを持つほど映像論では新進気鋭の研究者として知られているが、基盤教育では赴任以来、フランス語Ⅰ（前期）およびフランス語Ⅱ（後期）を担当してきた。私たちが授業参観したのは5月27日のフランス語Ⅰである。まず解説が丁寧でわかりやすかった。また講義は小テスト、解説、ドリルと上手く構成されている。メリハリが利くため学生はみな集中して授業を受けていた。誤った点をひとつひとつ丁寧に解説していることは初習外国語では大事な事であり、この点でも学生の信頼を得ているのではないかと推測される。実際、学生による授業評価の総合評価は、昨年のフランス語Ⅰは2クラス担当し、4.38と4.48。フランス語Ⅱは4.43であった。ちなみに同氏は平成24年度の合宿セミナーにも参加しており、基盤教育の授業改善に意欲的であることも評価されて良いであろう。	
	理学部	深澤 知 准教授	深澤氏は、平成21年後期に山形大学に着任した。教学を専門としない学生への丁寧な講義には定評があり、親しみやすい語り口ときちんと準備した内容で、授業評価アンケートにおいても、常に高い評価を受け続けている。サイエンススキルの微分積分学は、授業内容の大半が基礎・基本の定着に充てられるため、学生の勉強意欲を維持するのが非常に難しい科目である。深澤氏は、独特の語り口を駆使して、十分な準備の上で学末に飽きさせない講義を継続的に行っている。その技量は、若干若手教員の中でも特筆すべきものであり、現状に満足せずに更なる研鑽を続ける深澤氏に期待して、「ベストティーチャー新人賞候補者」として推薦する。	
平成27年度 ベストティー チャー賞	教育実践研究科	渡部 泰山 教授	平成26年度前期の授業科目『東北芸術文化論（文化論）』において、受講生132名のうち112名が回答した「学生による授業改善アンケート」で総合評価が4.85という驚くべき高い評価を受けている。熱意平均も4.90とすこぶる高い評価を受けている。 また、当該授業科目においては、講義資料だけでなく映像・写真・美術カタログ等をも準備して、宮沢賢治等東北六県の芸術・文化領域で日本および世界に大きな影響を与えた人物を取り上げ、東北芸術文化の基層、芸術・文化を切り口に、これからの東北の可能性について学生に多面的に考えさせる工夫された授業を行っている。加えて、学生が自由に意見や感想を出し合える学習環境の醸成にきめ細かく配慮している。 さらに、授業が終了する度に、学生に授業での疑問点や感想などについて記述させ、次回の授業の導入として活用している。	
	基盤教育院	飯島 隆広	のべ599名の学生が、飯島隆広氏の担当した化学及び情報処理に関連した講義（8コマ）を受講し、そのすべての講義で非常に高い総合評価をつけている。 大学では単に事柄を教科書的に暗記するのではなく多面的な理解が求められるが、氏の担当講義では、専門的知識に裏付けられた豊富な例示や実証を元に、「化学は暗記である」という先入観を外し、学生が主体的な学びに向かうように配慮されている。高校までの化学とは趣が異なる大学での化学を、丁寧な講義資料と演習により無理なく学生に導入している。また、基盤教育FD事業においても、基盤教育ワークショップ及びFD合宿セミナーに積極的に参加し、日々の研鑽に努めている飯島氏は、ベストティーチャー賞の受賞に値すると判断するものである。	
	人文学部	中島 宏 准教授	平成26年度前期の学生投票の結果、中島宏氏が最多得票を得て、学生推薦のベストティーチャーになった。投票用紙には「興味の持ちやすい講義展開。」「現在の日本問題を分かりやすく説明してくれたから。」「教えることが明確。教養が深まる。」「授業が動画などを使用してわかりやすかつし、先生のはなしも面白かった。」「映像を見たり、おもしろい話を聞いたりしながら楽しく憲法を学べたから。」「まわりくどくないズバツとした物言が好き。」「楽しく分かりやすい。生徒も主体的に参加しやすい授業。苦手であった分野が好きになった。」「などの理由が書かれてあった。氏は、「日本国憲法」及び「映画で考える憲法問題」を担当し、魅力あふれる講義で学生たちを魅了し、主体的に考えさせ、苦手意識を克服させた。	

	受賞者		授賞理由	授賞式の様子
平成27年度 ベストティーチャー賞 【学生推薦】	基盤教育院	渡辺絵理子 准教授	平成26年度において、氏は生物科学に関連した授業を8コマ開講し、延べ635名の履修学生に対して、アカデミックな生物学へ誘う高度にして入門的な内容等を教授している。大学では複雑な生命現象を立体的に理解することが求められるが、氏の担当授業では、専門的知識に裏付けられた豊富な例示や実証を元に「生物は暗記科目である」という先入観を外し、学生の学習意欲を起こさせ、学生が主体的な学びへと向かうよう配慮されている。そのことは、学生の投票理由において、単に「授業がとても丁寧で分かりやすい」というだけでなく、「生物が楽しくなった」「知的好奇心を刺激させられる」「やる気が出てくる」という評価を得ていることよって裏付けられる。また、スライドやビデオなどの豊富な画像資料を用いて、学生の理解を助ける工夫がなされている。氏がベストティーチャー賞に値することは、「学生による授業改善アンケート」の総合評価が4.80、4.54、4.37、4.71、4.31、4.69、4.65、4.87と安定して非常に高い評価を得ていることから明らかである。	
平成27年度 ベストティーチャー賞 【新人賞】	教育開発連携支援センター	橋爪 孝夫 講師	橋爪氏の学生主体型授業が特に優れている点として、以下の3つが挙げられる。 1) 授業運営を学生に一部任せることにより、学生が授業に主体的に取組めるようにしている。具体的には、学生に最低限の運営手順を提示し、毎回の授業運営計画を提出させている。また、学生に授業運営の目的を明示させ、自身らで決めたことに対して責任を持って授業運営を行うよう指導している。 2) 学生グループへの介入も適度に行っている。具体的には、教員は各グループから提出される成果発表までの活動計画をポートフォリオにまとめ、その活動計画の内容を踏まえて、課題や問題点を学生にフィードバックしている。 3) 毎回の授業で、教員は学生に授業で学んでほしい点を伝えている。具体的には、シラバスの到達目標が各回の授業ではどの部分にあたるのかを確認できる一覧表を配布している。授業が始まる前に、教員はその一覧表を学生と確認し、意識づけを行っている。 以上のような橋爪氏の取組内容は汎用性が高く、今後、学生主体型授業に取組もうとする教員が橋爪氏の教授法を参考にすることは多くあるものと期待される。	
	実践教育プログラム推進センター	栗野 武文 講師	栗野氏は優れた大規模授業を運営している。その特筆すべき2点を挙げたい。 1) 200名を超える受講者でありながらも座学中心ではなく、グループワーク中心の授業を行っている。その授業運営において、栗野氏はこれまで大学や企業向け研修の講師として培った実践的な教育スキルを遺憾なく発揮している。 2) 学生の記入する振り返りシートを毎週回収し、コメントを付け、その次の授業で全員に返却している。毎週200名以上に對して手書きでフィードバックを行うことには、大変な労力と時間がかかるものである。しかし栗野氏は、学生の記入した学びや気づき等に対して教員が真摯に向き合うことは、「大人数のなかでも、自分の取組を見られている」という学生の安心感や信頼感につながっていると考え、この取り組みをひたむきに継続している。 栗野氏の授業は、平成26年度前後期の授業改善アンケートにおいて、総合評価が4.6以上と高い評価を受けていることから、本賞を受賞するに値すると判断される。	
平成28年度 ベストティーチャー賞 【学生推薦】	基盤教育院	千代 勝実 教授	学生投票の結果、ベストティーチャーとして最多投票を得ての受賞。投票内容には、 ・ 生徒の立場を常に考えているから。 ・ 自分たち学生のことを考えてくれていると感じました。 ・ 授業に対して意欲的になる授業を行ってくれる。 ・ 「自ら学ぶ」の講義で楽しく話すことができたから。 ・ 親身になってアドバイスしてもらえたから。 など	
	人文学部	中島 宏 准教授	学生投票の結果、ベストティーチャーとして最多投票を得ての受賞。投票内容には、 ・ 生徒の興味を引き出させる講義をしている。 ・ 非常に興味のもてる授業であり、ためになっている感じがすごいから。 ・ 憲法について色々な視点から様々なことを教えてくれたから。 ・ 辛い憲法の授業も楽しく受講できてから。 ・ 授業がとても面白く、わかりやすい。憲法について考えさせられることが多くあるため。 など	
平成29年度 ベストティーチャー賞	人文社会科学部	中島 宏 准教授	学生投票の結果、ベストティーチャーとして最多投票を得ての受賞。投票内容には、 ・ 分かりやすい。 ・ 『憲法』という内容で、様々な事件を取り上げ、中立な立場から、多くの生徒の意見を聞きだし、若者の興味を引く、最新の話題を混ぜるなど、多くの工夫がされていた。 ・ 話がおもしろく、興味を持って授業を受けることができる。 ・ ユーモア溢れる講義は、聞いていて飽きなかった。 ・ 学生の目線になって講義をしてくれるから。 など	

	受賞者		授賞理由	授賞式の様子
チャーター賞 【学生推薦】	教育企画部	千代 勝実 教授	学生投票の結果、ベストティーチャーとして最多投票を得ての受賞。投票内容には、 <ul style="list-style-type: none"> ・とても親身だから ・授業に対し熱心 ・質問にすぐ答えてくれる ・授業の終わりの演習で理解がさらに深まる ・講義にメリハリをつけて、しっかりやってほしいところはしっかりやってくれる など 	